

北九州市立文学館

# 友の会会報

第13号

令和3年8月

## 会員が集える場を

### 新会長に就任 加賀美清之さん

北九州市立文学館友の会は6月に役員を改選。会の創設以来、会長を務めてきた後藤みな子さんが退任し、新たに前副会長の加賀美清之さんが会長に就任しました。加賀美さんに、これからの活動に向けての抱負などを聞きました。また副会長に就任した江口恵子さんに投稿をいただきました。



加賀美清之さん

#### 小倉生まれの小倉育ちが。

博多で学生生活を送った4年間以外、小倉を出たことはありません。清水小、思永中、小倉高、それにTOTO（本社は小倉）とみんな徒歩で通いました。それでも驚くほど小倉のことは知りません（笑）。

#### 読書歴も豊富たそつですね。

子供の頃から本は好きでした。今でもよく読みますが、ただ活字が好きだとい

うだけで。川柳に「昔とは父母のいませし頃を云い」（麻生路郎）とありますが、今や自分が「昔」。長く読み続けているだけです。

あえて、好きな現代作家を3人あげると、辻邦生、山本周五郎、山口瞳。特に、辻邦生の「背教者ユリアヌス」は今でも好きな一冊です。今、よく読むのは、須賀敦子、茨木のり子。

#### 文学館との関わりは？

初代館長の佐木隆三さんとの付き合いはTOTOのころから。春になると、同好の士が集まり佐木さんの門司のご自宅「風林山房」で関門海峡を望みながら酒を酌み交わしていました。現館長の今川英子さんとは、文学館で館長の文学講座を聴いたのが始まり。その後、TOTOの仲間で作る有識者を囲む会に招き話を伺うなどして交流を深めました。そんな縁もあり、「友の会」設立に参画することになりました。

#### 会長就任の経緯を教えてください。

前会長の後藤みな子さんが、文学館のリニューアルを機に後進に道を譲りたいとの意向を示され、後任を要請されました。友の会の顔という意味では、知名度

## 言葉の力を信じて

### 副会長の江口恵子さん

私は、38年間主に北九州市立中学校に勤めておりましたが、現在は下関の梅光学院大学に勤めています。

文学館との関わりは、約10年前、詩やノンフィクション文学などの小・中学生を対象にしたコンクールを通じてのつながりができたのがきっかけでした。「書くことの大切さ」や「言葉の力」を育てていこうとする趣旨に大いに共感したのです。

コロナ禍が続く、不安や困難が増幅していく昨今、人を差別したり、阻害したり、苦しめたりするような言葉を聞く機会が増えました。しかし、それと同時に

に、言葉というものが、人々のオアシスであったり避難所であったりと、人々の心を救済することもできる、かけがえないものであると再認識することもできました。

私たちは、文学を通して言葉を共有することが出来ます。そして、文学は、その言葉をさらに豊かにしてくれます。それらをつなぐ貴重な架け橋となっている北九州市立文学館の活動を、友の会が支援していきたいと思えます。会員の皆様のご協力をいただきながら精一杯努めてまいりますので、よろしくお願いたします。

が高く文学に造詣が深い方がよいのではと一度は固辞しましたが、強い求めに承諾しました。

#### どんな活動を目指していきますか。

後藤前会長は、「友の会」を立ち上げ、方針・理念を明確にし、運営の体制を作ることに腐心されました。それに目途が付き軌道に乗ったということで、退かれる決心をしたのではないのでしょうか。

#### 「友の会」の主役は、何といつても会員の皆様です。会員相互の交流を深め、

会員が参画できる場を、今まで以上に多く作れたらと思っています。会員相互の交流、情報提供には、SNSなど、インターネット環境の整備が必要かもしれません。役員にはその先頭に立っていただきたいと思っています。

#### 加賀美清之さんプロフィール

1947（昭和22）年、小倉生まれ。小倉高から九州法学部に進みTOTO入社（当時は東陶機器）。昭和48年に結婚、娘2人、孫4人。趣味は読書に加えて音楽鑑賞、映画鑑賞、旅行など。

会  
業  
の  
友

「朗読で味わう星野道夫さんの  
エッセイ」

7月24日、「星野道夫写真展」の関連イベント「朗読で味わう星野道夫さんのエッセイ」が、北九州市立文学館1階「交流ひろば」で行われました。友の会の自主事業でもあるイベントで、友の会の会員もボランティアで参加しています。

約30人の参加者を前に、星野さんの書籍の中から6作品を、友の会会員でもある仲紀子さんが代表を務める「ブックネットワーク北九州」の皆さん（仲さん・川嶋洋子さん・森恵理子さん・宮崎由佳さん）が朗読。それに合わせ、ステージ中央に設置されたスクリーンには、星野さんが撮影した写真が投影されました。

最初に披露されたのは、宮崎さんと仲さんによる「アラスカからのメッセージ」（星野道夫著作集 第5巻「新潮社」）。民族や環境が異なっても人間は「誰もがたった一度のかけがえない一生を生きる」という共通の一点で変わらないこと、そのような無数の点で世界は成り立っている。アラスカ先住民の家族と過ごした19歳の星野さんが抱いた思いが紹介されました。

続く「カリブーの旅」（星野道夫著作集 第3巻「新潮社」）では、朗読と写真を通し、広大なアラスカの大地を季節移動する数万頭のカリブー（トナカイ）の群れの様子を、川嶋さんが臨場感たっぷり表現しました。



友の会の会員も朗読を初体験



ブックネットワーク北九州の皆さん

プログラム3番目となる絵本「ナヌークからの贈りもの」（小学館）の朗読には、宮崎さんと一緒に、友の会会員の伊藤和人さんがボランティアとして参加。伊藤さんはアラスカ先住民の言葉で氷海の王者・シロクマを指す「ナヌーク」役を担当。アラスカ先住民の少年に真の狩人になるために必要な自然界の掟について教えるナヌークの言葉を朗読しました。

森さんが朗読を担当した「ジリスの自立」（星野道夫著作集 第4巻「新潮社」）では、「ホッキョクジリス」に餌を与えないよう、観光客に呼びかけるためにマツキンレー国立公園のレンジャーが制作したユーモアあふれる看板のエピソードが紹介されました。

アラスカをめぐる季節の半分を厳しい冬が占めるからこそ、春・夏・秋それぞれの季節をより強く感じる事ができると綴られた「アラスカの夏」（星野道夫著作集 第4巻「新潮社」）は、宮崎さんが朗読してくれました。

ラストとなる「もうひとつの時間」（星野道夫著作集 第3巻「新潮社」）は川嶋さんと仲さんが朗読。私たちが慌ただしく過ごしている同じ瞬間に、ザトウクジラは宙を舞い、ヒグマは悠然と歩みを進め、カリブーは河を渡っている。そういつた「もうひとつの時間」のことを心の片隅に意識できるかどうか。それは天と地の差ほど大きいという星野さんのメッセージが心に刺さりました。

参加者からは「朗読された方たちの素敵なお声がよく朗読の内容を深くしてくれました」「星野氏の想いがよく伝わってきた」「また、このような企画をしてほしいと思いました」など、好意的な意見が多く寄せられました。

また、今回のイベントは、受付担当の加賀美清之さん・加賀美幸枝さん、進行を務めた永田実穂さん、朗読に参加した伊藤さんら、友の会会員の皆さんがボランティアとして参加。揃いのデニムエプロンをユニフォームとして着用している姿も印象的でした。今後行われる自主事業でもボランティアを募集していくとのことなので、次回はおなたも参加してみませんか。

（植田詩生）

と  
画  
映  
画  
文  
学

「映画と文学」〜アートシネマ

今秋開催予定の「アートシネマ」を皆さまはご存知でしょうか。「東アジア文化都市北九州」の文化事業の一環として、北九州ゆかりの作家の原作映画を特集上映し、様々なゲストをお迎えしてトークイベントも行います。その先駆けとして行う「Ready To アートシネマ」も第3回目（8月27日〜9月3日）、今回で最後となります。

テーマは男性作家が描く戦争VS女性作家が描く戦争です。上映作品は、1944年製作、原作・火野葦平、監督・木下恵介、主演・田中絹代の『陸軍』。戦時下に陸軍省の依頼で戦意高揚を目的として製作された作品ですが、作品全体に反戦意識を感じます。ラストの福岡の大通りの場面はあまりに有名です。もう一つの作品は、1974年製作、原作・山崎朋子、監督・熊井啓、主演・栗原小巻の『サンダカン八番娼館 望郷』。かつて「からゆき」さんとしてはるか南の島に愛と青春を没していった日本の少女たちの秘話を描き、様々な問題を投げかけた作品です。29日には女優の栗原小巻さんの舞台挨拶、文学館の「火野葦平展」で講話を行った渡辺考さん（NHKプロデューサー）のトークイベントも予定しています。「映画の街・北九州」「文学の街・北九州」を実感して頂き、「アートシネマ」開催を楽しみにお待ちしております。小倉昭和館館主 樋口智巳



『陸軍』  
©1944年  
松竹株式会社



『サンダカン八番娼館 望郷』  
©1974年 東宝株式会社

リー  
エッセイ

### 星野道夫と 牧野元(ザ・カスタネッツ)

植田 詩生

北九州市立文学館で開催中の企画展「星野道夫写真展」を見てきた。厳しくも美しいアラスカの大自然。そこに暮らす人々や、シロクマ、グリズリーなどの動物たち…。星野が見たまま感じたままのアラスカの情景を映像のように読み手に見せてくれる彼の文章の数々を会場で久しぶりに目にしたが、言葉が持つ力は変わることなく、学生時代に初めて星野の文章に触れた時と同じ感動を与えてくれた。

最初に読んだのは『旅をする木』だった。星野道夫という人々にすぐに夢中になり、エッセイ集を次から次に読んだ。次第にアラスカにも憧れを抱くようになり、旅行ガイドブックを片手に旅程を考えるのも楽しみになった。アラスカには行かずじまいだが、まだ諦めてはいない。星野道夫は私にとって特別な作家であることは間違いないのだが、そのきっかけになった『旅をする木』をどういった経緯で読むことになったのか。企画展で同書を久々に手に取った私は遠い記憶を掘り起こしてみた。

…ああ、そうだった。思い出した。鍵となる人物は「ザ・カスタネッツ」というバンドのフロントマンで、ほとんどの楽曲の歌詞を書いていた牧野元だった。日本語が耳によく届く歌詞の言葉一つ一つの選び方がとにかく絶妙だった。「天才だ」と言う人もいた。「現代の吟遊詩人のようだ」と評した人もいた。牧野は音楽雑誌で毎回1冊の本について紹介する連載「本を読む」を持っていただけ、読書家としても知られる存在だった。

彼らを知ったのは大学受験のために「本を読む」ということが自分の生活からすっぽりと抜け落ちていた頃だった。ポール・オースター『ムーン・パレス』、柳家小三治『ま・く・ら』、アラン・シリトー『長距離走者の孤独』、サリンジャー『フラニーとゾーイ』、池波正太郎『剣客商売』、村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』…。

ここには書き切れないほど幅広いジャンルの本を、牧野元が薦めるからという理由だけで読んだ。そして「本を読む」ことが自分の生活の中に戻ってきた。読書の素晴らしさを思い出させてくれた恩人、牧野が所属する「ザ・カスタネッツ」は彼らのペースで今でも音楽活動を続けている。いつか耳にする機会があったら、歌詞に注目して聴いてもらいたい。



「旅をする木」  
星野道夫 文春文庫

おすすめの  
本  
思い出の本の旅  
「幼年童話の世界」  
仲 紀子

これまでの自分の読書歴を振り返る本の旅に出かけてみようと思う。同時に少しでも読書人口が増えることも願って、読書資料の紹介も兼ねて書きたいと思う。物心ついた頃から誕生日のプレゼントに必ず一冊の本が添えられるようになり、それが私にとってその年を代表する大事な一冊になっていった。そこから私の本の旅は始まる。

最初に鮮やかに浮かびあがってくる本は、絵本「ぐりとぐら」で有名な中川李枝子さんの幼年童話「いやいやえん」。幼稚園入園前にプレゼントしてもらい、まだ字の読めなかった私は何度も何度も母から読み聞かせしてもらった。リアリティーのある保育園生活とファンタジーの世界が溶け合った7つのお話は、面白くてたまらなかつた。

そうするうちに「自分で本を読んでみたい!」と言

始めた私に、読書が生涯の趣味で絵が得意だった父がイラストを、母が文字を担当して、我家の壁にお手製の「あいうえお表」が貼り出されることになった。「いやいやえん」読みたさに字を覚え、自分でファンタジーの世界に出かけて行き、思う存分旅することができるようになったのだ。そして、入園前に本で先に園生活を疑似体験するという読書の楽しみ方も知ることができた。

後に、北九州市地区読書推進実行委員会の講演会で招きかけた「ガンバの冒険」三部作の著者でもある斎藤敦夫先生とお話をする機会があった折り、斎藤先生が「いやいやえん」に影響され福音館書店に入社することにも繋がったと伺い、年齢も立場も超えて瞬時に「いやいやえん」の話で盛り上がるといううれしい思い出まで付いてきた。

この本は幼年童話の金字塔と言われ60年近くも読み継がれている。子どもの読書の始まりに大人のサポートは不可欠!絵本から字ばかりの児童書をいきなり一人で読ませる前に、字と絵が半々の幼年童話を手渡して読み聞かせてあげることが非常に大切なことと思う。因みに幼児を本の旅へ誘うお薦めの幼年童話は、郷土の作家でもある神沢利子さんの「ふらひばんじいさん」や「くまの子ウーフ」。高樓方子さんの「みどりいろのたね」「へんでこもりにいこうよ」シリーズ。外国作品なら断然「エルマーのぼうけん」シリーズ。次回は「民話の世界」へ旅してみたいと思う。ところで、会員の皆様の「思い出の本」は?



「いやいやえん」  
中川李枝子作/大村百合子絵  
福音館書店